

| | |
|--|--|
| 1 学校教育目標 | 2 本年度の重点目標 |
| 「生き抜く力の育成」 ～やさしく かしく たくましく～ 思いやりと感謝の心を持ち、自ら学ぶ意欲のあるたくましい児童の育成 | (1) 出番・役割・承認のサイクルを取り入れた学級・学校づくり (2) 言語力を基盤とした確かな学力向上 (3) 家庭・地域・民間学習塾「花まる学習会」の教育力を活かす活動 (4) 四育部による実効性のある活動 |

達成度 A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

3 目標・評価

①本校の特色に関わる評価項目

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 (左記の理由 ○は成果、●は課題) | 具体的な改善策・向上策 |
|------|-------------|--------------------|--|---|-----|---|---|
| 学校運営 | ○官民一体型学校の推進 | ・家庭との連携 ・地域との連携 | ①保護者の花まるタイムへの年間2回以上の参加率90%以上を目指す。 ②自主的参加の地域住民花まる支援員(花まる先生として写真掲示)35名以上を目指す。 | ①保護者に花まるタイムに2回以上参加してもらうために、保護者の都合に合わせて参加しやすい体制を作る。(分担表の工夫等) ②「おしちゃん、おばあちゃんの日」を設定する等、児童の祖父や祖母を花まる支援員として取り込むための取組を実施する。 ③学校支援地域本部(公民館)に地域の各種団体への働きかけを要請する。 ④管理職を中心として、地域行事、会合に積極的に参加して協力を要請する。 ①②日常的に児童側からも感謝の気持ちを伝えたり、コミュニケーションを図る手立てを工夫し、地域住民や保護者が参加して良かった、また来たいと思えるような取組とする。 | A | ○分担表を作成し、花まるの予定を書いたカレンダーとともに毎月保護者に配布した。 ○「おしちゃん、おばあちゃんの日」は2学期に実施することができた。 ○地域や各種団体への呼びかけは行っており、花まるタイム終了後、花まる先生方と各クラスで工夫したコミュニケーションが取れていたが、無理のない範囲で行うことが大切である。 ●年間の保護者の参加率は65%だった。 ●花まる先生の写真掲示は34名である。 | ・保護者の参加が思ったより増えなかったため、年度初めに保護者に向けた手紙を配布するなどの取組が必要である。 ・花まる終了後のコミュニケーションについては、学年に応じたやり方で、無理のないように実施する。しかし、感謝の気持ちを児童に持たせることを忘れぬよう指導が必要である。 ・新しい花まる支援員の方もいづれから増えつつあるが、まだまだ固定化しているため、さらに呼びかけを続けていく。 |

②「かしく」知識と学び方を身につけ、自ら学ぶ子どもの育成

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 (左記の理由 ○は成果、●は課題) | 具体的な改善策・向上策 |
|---------------------|-------------------------------------|----------------------------------|--|---|---|--|--|
| 教育活動 | ●学力の向上 【技】育成部 | ・基礎学力の向上 ・活用学力の養成 | ③各学年の家庭学習の目安の時間を習慣化させた児童85%を目指す。 ④「どのように学ぶか」学び方の積み重ねと定着を図る。 | ③「学力向上便り」「家庭学習の手引き」「まなぶくん」を活用して、家庭と連携を密にした取組とする。 ④各学年の実態に応じた家庭学習や自主学習の方法を工夫し、年間の見通しを持った取組とする。 ⑤校内研究「教えて考えさせる授業」における「スマイル学習(予習型の授業)」の実践により、家庭での予習の日常化を図る。 ⑥児童の実態から焦点化した学習規律、授業規律の徹底を図る。 | B | ○「学力向上便り」「まなぶくん」は、計画的に配布することができた。学力の実態を家庭に伝え、家庭学習のやりかたのアドバイスをするなど、家庭との連携に役立った。 ○家庭学習が習慣化した児童については、96%(児童アンケート)、73%(保護者アンケート)という結果であった。南方の成績の伸びがあり、一概には言えないが、家庭学習が、ある程度習慣化してきたと見える。 ●授業の進捗の遅い方については、よりよい方法になってきたが、話を聞かず、宿題忘れなど、個人差があり、定着には至っていない。 | ・「学力向上便り」「まなぶくん」の活用について、成果が見られたので、次年度も改善を続けながら継続して行きたい。 ・予習についてはやり方をパターン化することで、ある程度は継続してできるようになったクラスもあった。予習をすることは、学力の向上にはつながると考えられるので、無理のないやり方を考え、継続して行きたい。 |
| | | | ⑤算数科の授業において、児童の主体的な思考・判断・表現を引き出すための教材提示(発問等)の工夫を日常化する。 | ⑤日々の算数科授業における理解深化の過程で、効果的であった教材提示の工夫を毎月、紹介し合うことで各実践に学ぶ研修とする。 ⑥全職員による年一回以上の授業公開を核として、活用学力を身につけさせる指導方法について学び合い、指導力の向上を図る。 | B | ○授業導入の問題提示を工夫する算数の授業が増え、職員が授業改善の意識が生まれた。 ○12月までに、全職員が研究授業を行い、児童が主体的に学ぶ姿が目撃された授業を行うことができた。 ●教材提示(発問等)の工夫を日常的に行っているが、質問に100%の教職員が「やや適度」はなると答える「よくあてはまる」と答えた教職員はいなかった。 | ・児童が主体的に学ぶためには、さらなる授業改善の意識が必要であり、授業評価シートを用いてほしい。 ・思考・判断・表現を引き出すために、綿密な単元全体の指導計画を立てるようにする。 |
| | | | ⑥保護者授業参観、公開授業等で、年1回以上タブレット端末または、「スマイル学習」を活用した授業を実施する。 ⑦校内研究「教えて考えさせる授業」の予習の過程に「スマイル学習」を実施率(市調査)を60%以上とする。 | ⑦ICT支援員との連携を密にした、授業実践を行う。 ⑧「スマイル学習」やタブレット端末の活用、プログラミング学習についてICT支援員と連携したシートの研修会を年間3回以上開く。 ⑨校内研究「教えて考えさせる授業」の予習の過程に「スマイル学習」を日常的に活用する。 | A | ○授業参観などで、どの学年もタブレット端末を活用した授業実践を行うことができた。スマイル学習として、教えて考えさせる授業の活用ができた。80%の保護者が「かしく」がよいと答えている。 ○「スマイル学習」やタブレット端末の活用、プログラミング学習についてICT支援員と連携したシートの研修会を行った。44名の教職員が、ICT支援員と連携した授業の実践率を53%程度であり、60%以上は達成している。 ●今年度もICT支援員と連携して授業実践を行うことができた。ICT支援員と連携したシートの研修会を開催し、自分自身で実践することができた。ICT支援員と連携した授業実践は、自分自身で実践することができた。ICT支援員と連携した授業実践は、自分自身で実践することができた。 | ・パワーポイントなどを使って作ったスライドショーや、動画、音楽、画像などの教材は、内容を加工・修正したり、次年度の参考にしたりして共有できるようにする。 ・電子教科書の中にまだまだ役に立つような機能が残っているのを知らされるようにする。 ・スマイル学習が活用されている単元の単元の授業を録音して授業で活用できるように、タブレット端末を用いた「スマイル学習」実施率を高める。 |
| ○外国語教育の推進 【技】育成部 | ・新教育課程の実施に向けた外国語教育の推進 ・国際理解教育の推進 | ⑧外国語活動や外国語科に意欲的に参加する児童95%以上を目指す。 | ⑧ALTを活用した「ミッション」を実施する。 ⑨ALTと連携して日常的に英語に触れる取組や環境整備を行う。 ⑩花まる英語を実施する。 | A | ○前年度に続き、「フレイズミッション」を行った。ミッションをクリアした児童を表彰するため、クリアした児童に「世界地図」をプレゼントした。結果、児童と教職員(ALT含む)の間において、英語でのコミュニケーションを取る場面が多くなった。 ○今年度も「フレイズミッション」を作成した。授業の中で日本語、英語を併用して手紙に書くものを作成した。 ○学校評価アンケートにおいて、「英語のしゅぎょうは、楽しい」と回答した児童が94%であった。 | ・「フレイズミッション」は好評であったが、授業時間外において、それだけで児童に対する学習意欲を維持することは困難であった。年間時間や英語のクロスカキユル等の工夫を行い、外国語に対する学習意欲の維持を図る。 ・「フレイズミッション」の答えが分かっているにもかかわらず、教職員に答えを伝えることを恥ずかしがり、世界地図のマークが思うように進められなかった児童が見られた。児童の答えを聞き出す手立てを要する。 ・イングリッシュポスターの取組を増やす手立てとして、フレイズミッションやALTとの連携を要する。 | |

③「やさしく」思いやりと感謝の心で、だれとでも仲良くできる子どもの育成

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 (左記の理由 ○は成果、●は課題) | 具体的な改善策・向上策 |
|-----------------------|--------------------|-----------------------------|--|--|--|---|--|
| 教育活動 | ●志を高める教育 【絆】育成部 | ・特別活動の充実 | ⑨児童の主体性及び集団の自治の力を向上させる。 ⑩「友達と協力して、ものごとを最後までやりとげ嬉しかったことがあるか」の質問に「ある」「どちらか」と回答する児童90%以上を目指す。 | ⑨⑩学校行事、児童会活動、学級活動において、他者と協力することの大切さ、困難を乗り越えたときの達成感を実感できる活動を年間の見通しを持って複数回、設定する。 ⑪上記活動の設定に参考となる実践事例資料を紹介する。 ⑫上記活動において、適切な目標設定(個人と集団)及び評価を実施する。 | A | ○学校評価アンケートの結果は、84%の児童が「ある」と答えている。前年よりも1%増加したが、「よくあてはまる」と答える児童は85%であり、学級活動や学校行事を通じて、友達と協力して取り組む児童が多くなった。全校で取り組むことで、クラスで決めた目標を達成するために自主的に練習したり、励まされたりして、クラスの目標を達成することができた。 ●委員会活動は、児童が主体的に取り組むことができた。活動の振り返りができ、児童が自ら考え、行動できるような体制をつくる。 | ・各委員会での活動内容を見直し、児童が主体的に活動できるように、見直しをもつて計画を立てるようとする。 ・各委員会活動の運営委員会提案課題を学校全体で楽しく取り組めるようなものを用意する。 ・実践事例の紹介を行い、授業や特別活動で活用してもらう。 |
| | | | ⑪「考え、議論する道徳」授業の日常的実践を目指す。 ⑫保護者、地域が一体となった道徳教育を目指す。 | ⑪参考となる実践事例資料を定期的に紹介する等して、「考え、議論する道徳」授業を推進する。 ⑫土曜開校でふれあい道徳を公開し、家庭、地域と一体となった実践を行う。 | B | ○ふれあい道徳は、8割以上の保護者に参観してもらった。また、授業について児童と一緒に考えてもらう良い機会となった。 ●全員参加型で必ず判断場面を設ける授業の展開については、各クラスで取り組むことができたが、「考え、議論する道徳」についての実践例を紹介し、深めることができなかった。 | ・ふれあい道徳実施時期に、親子で「考え、議論する道徳」の授業について、参考資料を紹介することができれば、紹介だけに留まらずに、そのまま実践につながる可能性がある。 ・「考え、議論する道徳」について、日常的に深めることができるように、担当教員が年に1回実践例を先生方に紹介する。 |
| | ●心の教育 【心】育成部 | ・道徳教育の充実 ・人権・同和教育の推進 | ⑬自己共に大切に、認め合う差別のない集団づくりを努める。 ⑭Q-アンケートにおいて、「学級生活満足度」65%以上を目指す。 | ⑬⑭全ての児童に、出番・役割・承認のサイクルのある学校行事や学級づくりを実践し、児童の自己肯定感を高める。 ⑮⑯教師が互いに学び合いながら、支持的風土のある学級づくりを実践する。 ⑰⑱Q-アンケート(年間2回)や生活アンケート(毎月)の結果を学級経営に生かす。 ⑲⑳人権週間や全学年人権委員会や人権講話に取り組み児童の人権意識の高揚を図る。 | A | ○2学期のQ-アンケートにおいて2/3の学級が「学級生活満足度」65%以上を達成した。毎月の生活アンケートやQ-アンケートでの児童生活満足度等、児童の困りごとや、嬉しかったことなどを児童に伝え、学級経営に生かすことができた。 ●人権週間を設け、人権について考えた。人権委員会が「人権講話」を発表した。児童が主体的に取り組むことができた。 ●人権週間を中心に、友達思いの行動や言葉を取り上げ、共有し、認め合う取り組みを行うと、より人権意識を高めることができたと考えられる。 | ・人権週間を中心に、思いやりのある行動や言葉を取り上げ、共有し、認め合う取り組みを行うと、より人権意識を高めることができたと考えられる。 ・Q-アンケートや生活アンケートは、児童が困っていることや、嬉しかったことなどを見取り、学級経営に生かすことへ役立っている。引き続き、実施していくようにする。 |
| | | | ⑮「学校は楽しい。」と答える児童95%以上を目指す。 | ⑮生活アンケート(毎月)、いじめアンケート(年間1回)を実施し、児童の状況把握を行い、いじめ等を早期発見し適切に対応する。 ⑯教育相談週間を設けて全児童の個人面談を行い、相談にのるとともに、情報収集に努める。 ⑰外部機関と連携し、児童の実態に応じた情報モラル教育を行う。 ⑱多様性を当たり前のものとして理解し、認め合い支え合う集団づくりを全校あげて実践する。 | A | ○学校評価アンケートの結果は、92%の児童が「学校は楽しい」と答えている。具体的な数値よりわずかに下がるが、毎月の生活アンケートの結果からでも、概ね達成できた。 ○本年度のQ-アンケートを2回行い、児童との面談に生かしたり、アンケート結果を活用して休めたり2月に、学級経営に生かすための研修会を開いたりすることができた。 ●オンラインゲームをしている児童が高学年で多い。 | ・外部機関と連携して児童への情報モラル教育の推進を図るとともに、学級懇話会や研修会等を通して保護者への啓発を図っていく。 ・各学年に仲間づくり活動の資料を配布し、授業で活用してもらう。 |
| ●いじめの問題への対応 【心】育成部 | ・生徒指導と教育相談の充実 | ⑮「自分から先にあいさつをする児童90%以上を目指す。 | ⑮「自分から先に」挨拶をする。⑯「いつでも、どこでも、だれにでも」等評価の観点に明確にした指導を行う。 ⑰5～7月、9～12月、1～3月、年間の見直しをもった3回の取組を仕組み。 ⑱短期、中期、長期の適切な評価を実施する。 ⑲児童会等と連携して、児童に主体性を持たせた活動を仕組み。 | B | ○1月の児童アンケートでは、「自分から先に挨拶をする」児童が95%、7%下がった。 ○「自分から先に」挨拶の取組より自分自身の挨拶を、客観的にとらえることができるようになった。表れと考える。 ○3回の取組を仕組みすることで、どんな挨拶をめざせばいいかを意識させることができた。少しずつ定着している。 ○「自分から先に」挨拶の取組を行い、教師の評価カード、委員会を通して児童の活動へと繋げることができた。 | ・なぜ挨拶が大切なのか、どんな挨拶が上手なのか、全校朝会などで示しながら、挨拶に対する意識を高めるようにする。 ・児童会活動と連携し、児童が主体的に取り組むような活動を仕組みでいく。 ・いろいろな取組と共に、日常的に教職員が子どもたちに元氣な挨拶を促していくことで、気持ちのよい挨拶を定着させていく。 | |
| | | ○生活習慣・礼儀 【心】育成部 | ・あいさつの定着 | ⑮「自分から先に」挨拶をする。⑯「いつでも、どこでも、だれにでも」等評価の観点に明確にした指導を行う。 ⑰5～7月、9～12月、1～3月、年間の見直しをもった3回の取組を仕組み。 ⑱短期、中期、長期の適切な評価を実施する。 ⑲児童会等と連携して、児童に主体性を持たせた活動を仕組み。 | B | ○1月の児童アンケートでは、「自分から先に挨拶をする」児童が95%、7%下がった。 ○「自分から先に」挨拶の取組より自分自身の挨拶を、客観的にとらえることができるようになった。表れと考える。 ○3回の取組を仕組みすることで、どんな挨拶をめざせばいいかを意識させることができた。少しずつ定着している。 ○「自分から先に」挨拶の取組を行い、教師の評価カード、委員会を通して児童の活動へと繋げることができた。 | ・なぜ挨拶が大切なのか、どんな挨拶が上手なのか、全校朝会などで示しながら、挨拶に対する意識を高めるようにする。 ・児童会活動と連携し、児童が主体的に取り組むような活動を仕組みでいく。 ・いろいろな取組と共に、日常的に教職員が子どもたちに元氣な挨拶を促していくことで、気持ちのよい挨拶を定着させていく。 |

④「たくましく」心身共に健康で、粘り強くやり通す子どもの育成

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 (左記の理由 ○は成果、●は課題) | 具体的な改善策・向上策 |
|--------------------|------------------------|--|---|-------|---|--|-------------|
| ●健康・体づくり 【体】育成部 | ・望ましい生活習慣・食習慣の形成と体力づくり | ①家庭でのテレビやゲーム、SNSの時間が平日60分以内の児童75%以上を目指す。 | ①「技」育成部と連携して、学力向上が基本的な生活習慣と深い関わりがあることを確保したり学力向上より等保護者に啓発していく。 ②定期的な、生活習慣の点検を行い保護者と連携した取組とする。 ③生活習慣の点検とあわせて、家庭でのテレビやゲーム、SNSの時間を調査し、保護者の意識を高めていく。 | B | ●家庭でのテレビ・ゲーム・SNSの時間が平日60分以内の児童は45.9%であり、全校生徒の半分を下回る結果であった。テレビは29.9%、ゲーム・SNSは61.9%であり、特にテレビを見ている児童が多かった。75%を達成するためには、工夫が必要である。 ○保健実習中、感染症の児童に対して個別の保健指導を実施し、就寝時間を意識させることができた。 | ・引き続き、おたより等を通じて、テレビ・ゲーム・SNSの時間設定や生活習慣を整えることの大切さについて、家庭との連携を図る。 ・子どもが興味をもつような内容で掲示物を作成するなど視覚的に訴えていく。 | |

⑤その他の評価項目

| 領域 | 評価項目 | 評価の観点 (具体的評価項目) | 具体的目標 | 具体的方策 | 達成度 | 成果と課題 (左記の理由 ○は成果、●は課題) | 具体的な改善策 |
|-----------------------|----------------------------|---|---|-------|---|---|---------|
| ●業務改善 教職員の働き方改革の推進 | ・教職員の時間外勤務の削減 | ①全職員年間の月平均45時間未満を目指す。 ②定時退勤日の実践達成率95%以上を目指す | ①各自で年間及び月ごとの目標値を設定し、ワークライフバランスと資質・能力の向上を意識した、取組を実施する。 ②③タイムレコーダーにより教職員の時間外勤務を正確に把握すると共に、各自で④⑤時間外勤務状況を確認するようにし、業務改善の意識高揚を図る。 ⑥職員会議に労働安全衛生委員会を設け、議論の場を設定するなどして全員参加の主体的取組とする。 ⑦⑧教職等が行っている業務の一部を事務職員が支援する等事務職員の業務への参画を進める。 ⑨定時退勤日を金曜日に設定し、遅くとも18時には学校を閉める。 ⑩様々な取組を前年度踏襲ではなく、その必要性、効果、実施方法を互いに問いつけ合い議論する風土を醸成する。 ⑪経験年数の浅い若手職員へ、優先順位や効率的な仕事の方法を先輩教職員が伝えてアドバイスする、若手育成の風土を醸成する。 | B | ●4～1月の時間外労働月平均時間、45時間未満を達成した職員は、13名中9名であった。 ●金曜日の定時退勤(18時までに)については、職員の意識が高まったが95%以上の達成まではあと1歩である。 ○水曜校時(午後)の工夫、「花まるタイム」を週4～週3へ、読書会の廃止、個人懇談(夏季休業中)の縮減(希望性)、育友会親子ふれあい活動(1～5年)休日から休業日開催へ、通知表の所見項目の軽減、バス旅行・修学旅行・自然教室・職員会行事・事務室へ、学費支払いを事務室へ、長期休業中の当番勤務の縮減(冬季休業より)、運動会・卒業式の練習時間の縮減等、実効性のある取組ができた。 | ①働き方改革や業務改善の目的「本校教育目標達成に向けた教育の質の向上」「働きやすさ、働きがいのある職場づくり」2つの視点より浸透させたうえで、職員の主体的な取組を促していく。 ②定時退勤日は選択制とすることで、各個人のライフワークの選いに合わせた、より主体的に責任をもって取り組んだりできるようにする。 | |
| ○安全安心な学校づくり | ・校内外の児童の安全確保 ・服務規律保持の徹底 | ②0家庭、地域と連携し、校内外の事故、犯罪被害の未然防止に努め、発生を0にする。 ③教職員の編制正と服務規律の保持に努め不祥事、交通事故を0にする。 | ②③職員会議に危機管理委員会を設け、危機管理体制の確立や過去の事件・事故の事例や不祥事や教職員の事故の事例を紹介する等、年間計画の基盤的・教職員の危機意識の高揚を図る。 ④上記危機管理委員会を「ゼロの日」(毎月一回)と位置づけ、議論の場やチェックポイントによる振り返りの場を設定するなどして、不祥事削減や交通事故防止を全員参加の主体的取組とする。 ⑤危険箇所や児童の校外での様子の情報収集を図る等、保護者、地域との連携による安全体制を整え、事故や犯罪被害防止に努める。 ⑥学校情報メール等で、事件・事故の未然防止のための注意喚起を行う。 ⑦長期休業等には、危機管理マニュアルを活用し、組織的に動く実践的研修を実施する。 | A | ○児童の大きな事故等の発生状況は、0であった。 ○教職員の交通事故及び服務規律違反も0であった。 | ②大雨災害の頻度が高まっている。大雨に関する災害教育(武雄市立東川登小学校へ依頼済み)及び職員が地域の危険箇所の現地研修を次年度実施予定。 ③災害に備える職員も、職員が危機の想定範囲を広げることができるように、公費の回覧板等を用いて、話題を提供していく。 ④心身が疲れているときに、事故は起きやすい。業務改善と合わせて、メンタルヘルスの面からセルフケア、ラインケアの充実を図る。 | |

4 本年度のまとめ・次年度の取組

「かしく」校内研究の議論の場を通して、教職員の授業改善への意識が高まっている。インプット型の学びからアウトプット型の学びへの過渡期となる1年であった。「やさしく」…あいさつの取組を通して、児童が自身のあいさつの実態を客観的にとらえることができるようになったことは、次のステップにつながる成果である。「たくましく」…家庭でのテレビやゲーム、SNSの問題への取組として、健康面や学力面と合わせて、児童がしているオンラインゲームの実態を保護者を知ってもらう取組もできた。次年度は、児童の姿が目に見える形で、成果を上げなければならない。「自信」と「主体性」をキーワードとして以下のように取り組んでいく。①児童の主体的な活動を重視した学習過程(単元構成)の工夫。②地域教育資源を有効活用した生活科・総合的な学習の時間の充実。(相手意識と目的意識を明確にして、表現活動やコミュニケーションを取り入れた学習)③あいさつや言葉遣いの指導の年間計画と振り返り活動の充実。④児童を信じて任せ出る出番・役割・承認を意識した教育活動の工夫(児童会活

●は共通評価項目、○は独自評価項目